グリーンツーリズムは楽しいですか？

第４回

希望学

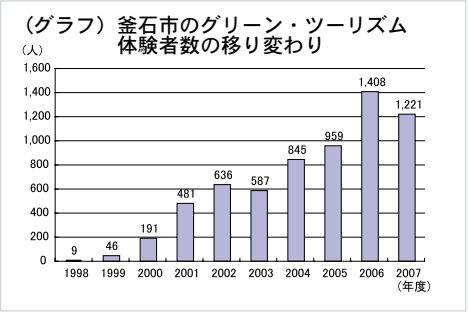
大堀　研さん

Profile　おおほり・けん
1970年生まれ。東京大学社会科学研究所特任研究員。専攻は地域社会学、環境社会学。釜石市のほか、神奈川県鎌倉市、北海道などで、主に環境分野のボランティア・ＮＰＯの研究に従事。

僕は社研釜石調査隊の中で一番の心配性なので、06年７月に初めて釜石駅に着いたときも、かなり不安になってしまった。釜石にはグリーン・ツーリズムの調査をする予定で来たのだが、駅の目の前にこんなに大きな工場がドドーンとあるまちで、本当にグリーン・ツーリズムなんてやっているんだろうか、と思ったのである。これは心配のし過ぎだった。その日の晩には、釜石でグリーン・ツーリズムがちゃんと行われていることが分かった。ところが僕の心配は続いた。今度は、「鉄のまち釜石」に市外からわざわざグリーン・ツーリズムを体験しに来る人がいるんだろうか、と思ってしまったのである。「鉄」と「グリーン」が、なんだかうまくかみ合わない感じがしてきたのだ。

そこで、どれくらいグリーン・ツーリズムの体験者数がいるかをみてみよう。すると、98年度（釜石にＡ＆Ｆグリーン・ツーリズム実行委員会ができた年）には９人だったが、06年度には１４０８人になっている。07年度は少し減ってしまったけれど、大ざっぱにいえば、これまでは増加してきたといっていい（グラフ参照）。釜石のグリーン・ツーリズムは、どうも着実に知名度を高めているようだ。僕は心配しすぎだったのかもしれない。

だけど、どうして「鉄のまち」のグリーン・ツーリズムがお客さんを集めるようになっているんだろうか？そんなことが疑問だったが、調査を進めるうちにだんだん答えがみえてきた。釜石のグリーン・ツーリズムの特徴の一つは、海の漁師さんたちと山の農家の方々が協力していることだ。農業と漁業が一緒になってグリーン・ツーリズム



を進めているところは釜石以外にもある。でも釜石でだって面白い特徴には違いない。それに加えて、酒造会社の浜千鳥さんが「酒造り体験塾」として田植え体験会などを開催している。また建設会社山元の社長さんが、市役所の人や漁師さんと協力して横浜からの体験旅行の受け入れもしている。とにかくいろんな人たちがグリーン・ツーリズムに関わっている。これが、だんだん人を集めるようになっている秘訣（ひけつ）ではないかと思う。外からくる人間からすれば、その土地のいろいろな人に会うことができるのはとても面白いことだろうから。そして…

調査を進めるうちに、もっと大事なことがあるかもしれないと考えるようになった。そのきっかけは、あるグリーン・ツーリズム関係者のこんな発言を読んだことだ。「以前は、山の中の集落を恨めしく思うことばかりだったが、今は心から自信と誇りを持ち、山での生活を楽しむ気持ちのゆとりがでてきた」（95年の岩手東海新聞より、一部変更）。この人は実行委員会ができる前からグリーン・ツーリズム的な活動を続けてきた人だ。いろんな活動を続け、生活を続けていくうちに「楽しむ」ことができるようになってきた、というのは僕にはとても興味深い。また、実行委員会の会長さんにインタビューしたときに、A＆F実行委員会はご年配の方が多いですねと質問してみた。すると会長さんは、若い人は子育てなどで手がかかる時期だから、むしろ年配者がグリーン・ツーリズムに携わって、未体験のことを体験することに意義があるんだ、と答えてくださった。ここでも、ポイントは「楽しむ」ことだと思う。「未体験のことを体験する」のが続いているのは、嫌なこともあるかもしれないけど、楽しいことも多いからだろう。嫌なことしかなかったら、続けることは難しいはずだ。要するに、お客さんだけではなく、釜石の人たちもグリーン・ツーリズムを楽しんでいるようなのだ。

これはとても大事なことだと思う。「観光」となると、「お客さんを呼び込まなくてはいけない」ということになり、ついまちの外側にばかり目が向いてしまう。でも外側にばかり目を向けていると、まちの人には楽しくないことが起こったりもする。お客さんを呼び込もうとして、まちの歴史や文化とは何の関係もない、つまらない施設を作ってしまうとか。観光を進めるためには、変えることが必要なときもある。でも、自分たちが楽しいかどうかを考えることも大切だろう。そもそも、まちの人が楽しめないことを、まちの外の人たちが楽しんでくれる、なんていうことがあるだろうか。

こういった、観光やツーリズムを考える上で大事なことを、僕は釜石から教わっている。そして、たとえ「鉄」と「グリーン」がちょっとかみ合わないとしても、両方楽しんでみるのがいいのかもしれない、と考え始めている。まちの人が楽しめば、少しの矛盾が魅力に変わる可能性だってある。そのためには工夫も必要になるかもしれないけれど、まあ心配しすぎてもあまりいいことがない。釜石の人ならきっと面白いストーリーを思いつくだろう。と少し心配性でなくなっているのも、釜石で調査をさせていただいているおかげかもしれない。